

Ramazanoglu, Caroline and Janet Holland, 2002, "Escape from Epistemology? The Impact of Postmodern Thought on Feminist Methodology", *Feminist Methodology: Challenges and Choices*, SAGE Publications, 81-101.

キャロライン・ラマザノグル, ジャネット・ホラント, 2002, 「認識論からの逃亡? ——ポストモダン思想がフェミニスト方法論に与えたインパクト」

※ () の数字はページ数を、[]内は原文を表す。

### レジュメ作成者による紹介文

本稿は、フェミニスト方法論の理論および実践を体系的に整理した *Feminist Methodology: Challenges and Choices* に収録されている。本稿は、ポストモダン思想がフェミニスト方法論に与えた影響について論じている。

## 1. 導入 (83-86)

- フランスの理論家や哲学者 (Michel Foucault, Jacques Derrida, Gilles Deleuze など) を中心に発展を遂げたポストモダン思想は、知識生産およびジェンダーに関する考察を展開してきた。
  - 本稿では、ポストモダン思想がフェミニスト方法論にいかなる影響を与えているのかを考察する。

## 2. ポストモダン思想がフェミニズムにもたらしたもの——フェミニスト方法論の基礎を一掃する (86-93)

- 以下、ポストモダン思想がフェミニスト方法論に与えた影響について、7つの観点から示す。

### (1) 「真理」の追求を目指す科学的方法からの解放 (86-88)

- 相対主義的な立場をとるポストモダン思想は、ジェンダーに関する現実を明らかにしようとするフェミニスト的知識を、単なる1つの思考様式として判断する。そして、社会的現象に関する「真理」を追求することは不可能であるという立場に立つ。
  - すなわち、ポストモダン思想に立脚すると、いかなるフェミニスト的知識も一般的な妥当性を持つことができない。
  - そのためフェミニストたちは、ジェンダーに関する現実について、何が正しく、何が偽りなのか言及することができないというジレンマに直面する。
- ポストモダン思想家の Michel Foucault は、このジレンマを、以下のようなアプローチをとることによって回避している。
  - 彼は、セクシュアリティに関する言説を分析する際、それらの言説のうち何が真理で何が偽りなのかを判断しようとするのではなく、それぞれの言説の機能や、異なる言説間の関係性に着目した。

- ◇ 彼は、「正常なセクシュアリティ」に関する「現実」を発見することはできないとし、特定の形態の「セクシュアリティ」は、それが言説の中で構築されているという意味においてのみ実在すると主張する。
- ◇ セクシュアリティに関する言説は、権威的な経路(例えば、正式な教育、法律、医学、精神医学)を通じて、セクシュアリティとは何かを規定する。その言説に伴う実践によって、「正常なセクシュアリティ」と「逸脱したセクシュアリティ」(たとえば、「良い夫」、「不感症の妻」、「異性愛者の正常な男」、「変態」)が立ち現れる。すなわち、「正常なセクシュアリティ」や「変態」の性質は、研究者によって発見されるのを待っている根本的な現実としてではなく、言語行為や権威づけの実践のなかで生み出される言説的構築物であると Foucault は主張する。
- ◇ Foucault の理論では、セクシュアリティの「現実」を認識することはできないが、研究者は、たとえば「正常な異性愛」という「真理」がどのように構築され、それがどのような効果をもたらすかという点を検証することができる。

## (2) 二項対立的思考からの解放 (88-89)

- Jacques Derrida が提起した「脱構築[deconstruction]」という概念は、フェミニスト方法論に大きな影響を与えた (Nash 1994)。
  - ・ Derrida は、西洋哲学における二項対立的思想を批判的に分析した。彼は、西洋哲学における言語の意味は、対立と差異化によって生み出され、理解されると指摘する。そのため、言語における意味を分析するためには、こうした二項対立を明示しなければならない。
  - ・ 脱構築の過程では、一対のカテゴリーの相互依存性と、男性的／女性的、理性／自然、心／身体、文明／原始、客観／主観、人間／動物といった、一対のカテゴリーの一方に優先性を与える二項対立の階層性の双方が明らかにされる。この脱構築により、「われわれが使用する言語の歴史的堆積の意味合い」(Derrida 1970: 271)が浮き彫りにされる。
- 脱構築の概念に触発されたフェミニストは、西洋思想における二元論(特に、男性／女性の対立とその優劣の関係性)の再認識に取り組んできた。代表的研究として Donna Haraway (1989,1991) が挙げられる<sup>1</sup>。
  - ・ フェミニストは脱構築を通じて二項対立のカテゴリーを解体することで、二項対立に内在する権力関係を探り、非対立的なカテゴリーを通じた思考方法を追求できる。

---

<sup>1</sup> Donna Haraway は、人間とマウスや霊長類の関係のような特異なトピックを取り上げ、難解な文章を書くフェミニズム理論家として知られている (Haraway 1990, 1997)。カルチュラル・スタディーズの影響を色濃く受けている Haraway は、積極的かつ戦略的にアートやサイエンス・フィクションを分析対象とした (Haraway 2011)。彼女は生物学から科学史に専攻を転じており、それゆえ彼女の著作は生物学についての豊富な知識によって裏付けられている (鈴木 2020: 5)。

### (3) 知る主体[knowing self]からの解放 (89-90)

- ポストモダン思想は、個々の自律的な主体によって「真理」が発見されるという、啓蒙主義や人文主義における「知る主体」という前提を批判し、「主体の死」を宣言する<sup>2</sup>。
  - ・ このようなポストモダン思想を引き継ぎ、フェミニズム理論における「主体」の議論を発展させたのが Judith Butler (1990) である。
    - ◇ Butler は、ジェンダーは行為主体性[agency]を持つ主体によって生み出されるのではなく、反復のプロセスによって構築されるのだと主張する。
- 多くのフェミニストは、「知る主体」を脱構築することによって、フェミニズムの政治的プロジェクトが頓挫することを危惧している。すなわちフェミニストたちは、「知る主体」の脱構築を、フェミニスト研究者が「女性」の利益のために働き、「女性」についての、「女性」のための知識を生み出す可能性を排除するものであるとみなしている。
  - ・ 例えば Rosi Braidotti は、フェミニストが「主体の死」を宣言するためには、まず主体として語る権利を得なければならないと論じる (Braidotti 1991: 122)。
  - ・ それに対し Butler は、「主体の批判は、主体の否定や否認ではなく、むしろ、あらかじめ与えられた、あるいは基礎的な前提としての主体の構築のあり方を問う方法である」(Butler 1992: 9) と主張する。ここで彼女は、特定の主体がどのように構成されるようになったかを問うこと (=主体を問うこと) と、「主体の死」を宣告することを区別している。
- 専門的な知識を持つ主体として発言するフェミニストの権威を疑問視し、知識がどこまで適切か、倫理的か、一般的かどうかを議論することは、知識あるフェミニストと、その知識を無効にすることと同義ではない。
  - ・ このような議論は、誰が知識あるフェミニストとして構成されるのか、フェミニストは誰のために語るのか、フェミニストは何について語るのか、そして誰が、何を排除するのか、という問題を提起している。

### (4) 本質的なアイデンティティからの解放 (88-90)

- ポストモダンの思想家たちは、ジェンダー、人種、階級といった社会的アイデンティティに関する近代的概念は、あまりにも固定的、静的、非歴史的であると主張し、アイデンティティがいかに多様で、可変的で、不安定なものであるかを探求してきた。
  - ・ それぞれのアイデンティティはあらかじめ存在するのではなく、人々は常にそのアイデンティティに「なりつつある[being]」状態にある (Brah 1992; Hall 1990)。

---

<sup>2</sup> ポストモダン思想は、近代に対する異議申し立てを行い、その資格において、近代の原理である主体の死を宣告する (大崎 1998: 280)。ここでの主体とは、その能動性によって定義されることで、自ら自身の内で自己完結した主体である (大崎 1998: 288)。

- ポストモダンのアプローチは、女性／男性、ヒンドゥー／イスラム、黒人／白人、ゲイ／ストレートといったアイデンティティを放棄することを要求するのではない。
  - ・ 「知る主体」と同様に、それらのアイデンティティも問われる[be interrogated]べきものであると主張する。ここでいう「問う[interrogation]」とは、アイデンティティの歴史を問い、その境界の構成を検討することを意味する。
- ポストモダン思想のアイデンティティに関する立場は、フェミニストにとって両義的である。なぜならフェミニストは、「男」との関係において定義される固定的で本質的なアイデンティティとしての「女」を拒否しながらも、フェミニズムを駆動するための「女」というカテゴリーを保持することを目指すからである (Riley 1988)。

#### (5) 普遍性と自民族中心主義からの解放 (90-91)

- ポストモダン思想は、「女性」が「解放」を望んでいるという主張を、西欧の自民族中心主義の表現であるとみなす。
  - ・ 例えば Jean-François Lyotard (1984) は、女性の解放を目指すフェミニズムが、解放、科学、進歩といった「大きな物語[grand narrative]」に依存しているとして批判する<sup>3</sup>。
  - ・ Lyotard は、すべての「真理」は、特定かつ限定された言語ゲームのルールの中で生み出されるため、一般的というよりはむしろ局所的なものであると主張している。各ゲームのルール (あるいは知識を生み出す方法) は、何が知識としてカウントされるかを権威づける特定の方法を生み出す (Lyotard 1984: 60)。彼の見解において、フェミニズムの方法論は1つの言語ゲームに過ぎないため、女性の「従属」という「真理」は、異なるルールを有する他の思考方法では通用しない。
  - ・ これはフェミニズムに対する決定的な挑戦である。現代のフェミニズムの言語は、女性たちの間に共通の利益があると想定する言語と結びついているが、Lyotard はこの結びつきを破壊する (Lyotard 1984: 7)。
  - ・ 普遍性と自民族中心主義からの解放というポストモダン理論の提案は、フェミニズム理論にとって有益なものではあるが、政治的、倫理的、実践的な問題を内在している (Hekman 1992: 189-90; McNay 1992)。

---

<sup>3</sup> 石毛弓 (2007) の整理によれば、「大きな物語」という用語は Lyotard の『ポスト・モダンの条件』(1979=1989) のなかで最初に使用された。この著作の冒頭で彼は、科学と物語との葛藤について指摘をしている。科学にとって、神話に代表されるような「物語」は寓話以上の意味をもたず、知を探求するための手段として適切なものとはみなさない。しかし科学が神話・民話や説話より優位に立とうとするならば、自らこそが真理の探究者であり他はそうではないという正当化の言説が必要となる。だから科学もまた、自身の物語を必要とするのである。この場合、科学の言説は他の言説を制して自らの特権的地位を証明するためのものとなる。このように人びとにとって己が唯一の正当性をなうものだと主張する思想を、Lyotard は大きな物語とよんだ (石毛 2007: 55)。

#### (6) 物質的な身体化[material embodiment]からの解放 (91-92)

- ポストモダン思想は、身体の物質性を認めつつも、身体とセクシュアリティを社会的に構築されたものとして捉える。
  - ・ たとえば Butler (1993) は、身体に付与されている意味は、身体にあらかじめ存在するのではなく、それが身体に与えられることによって初めて存在するのだと主張する。
  - ・ Foucault (1984, 1991) は身体の分析において、物質的身体に関する「真理」を問うのではなく、身体に関する意味がどのように身体にマッピングされ、異なる状況においてどのような身体が社会的に構築されるのかを問う。
  - ・ フェミニズム理論において、身体の物質性および構築性に関する議論は、最も重要かつセンシティブなトピックの1つである (Caplan 1987; Jackson and Scott 1996)。

#### (7) 権力に関する固定的な理解からの解放 (92-93)

- フェミニストは、女性の経験を引き合いに出しながら、男性の権力を支配的で制度化されたもの、あるいは暴力的で抑圧的なものとして理論化するのに対し、Foucault は、権力を抑圧ではなく知識を生み出すという意味での生産的[productive]なものとして定義する (Foucault 1988: 118)。
  - ・ Foucault は系譜学[*genealogy*]のアプローチをとり<sup>4</sup>、言説の相互作用を通じて権力が行使されるパターンを探る。彼は具体的事例を用いながら、特定の歴史的瞬間に権力がどのように生み出され、行使され、正当化されるのかを分析する (Foucault 1988: 265)。
  - ・ この Foucault のアプローチが正しいとすれば、特定の権力の源 (=男性) と抑圧的な権力のシステム (=家父長制) を明らかにしようとするフェミニストによるアプローチは誤りとなる。

---

<sup>4</sup> 相澤伸依 (2005) は、Foucault の系譜学の特徴を3点に整理する。第1の特徴は、真理の否定と解釈主義である。これは、伝統的歴史学の想定するような超歴史的視点と普遍の起源・真理の存在を拒否し、歴史記述もある視点に立った1つの解釈であるとする立場である (相澤 2005: 11)。2つ目の特徴として、歴史における因果性・必然性という想定拒否が挙げられる。系譜学は伝統的歴史学が想定するような出来事の出現と連続的な必然性との間に通常想定されている関係を逆転させる。目的論に立つ伝統的歴史学は、出来事を必然的に生じたもの、連続的なものとして捉えようとする。これに対して、系譜学では、歴史の中で働く力は、何らかの目標を目指すものでも何らかの法則に従うものでもないし、誰かの意図によって働くものでもない (相澤 2005: 12)。第3の特徴は、歴史学が記述すべき対象を変化させるということである。その結果、伝統的歴史学が想定している「近いものと遠いもの」との関係も逆転する。伝統的歴史学は、遠い時代の出来事や高い価値が与えられてきたものを好んで記述の対象としてきた。なぜなら、そこに理想、例えば「最も高貴な時代、最も高められた形式、最も抽象的な観念、最も純粋な個人」といったものがあると想定したためである。しかし、系譜学はむしろ、今まで見過ごされてきた卑近なもの (例えば身体や食べ物など) を対象とした (相澤 2005: 12-13)。

- ・ このようにポストモダン思想は、男性の権力によって女性が抑圧されているという主張を否定するため、女性の解放とエンパワメントのためのフェミニズム的なプロジェクトを弱体化させる可能性がある。

### 3. ポストモダン思想に対するフェミニストの抵抗 (94-100)

- ・ ポストモダン思想は、フェミニズムがモダニズムの根源にある限界から逃れ、セクシュアリティ、ジェンダー、権力についての深い考察を可能にするという点で生産的であった。しかし、ポストモダン思想がフェミニスト方法論に「解放」をもたらす一方で、時には弊害をもたらすことも忘れてはならない。
  - ・ フェミニスト方法論は、ポストモダン思想が提供する利点を把握しつつ、その限界を評価する必要がある。以下では、ポストモダン思想の可能性と限界を考察することを試みる。

#### ■ 「女性」というカテゴリー (95-97)

- ・ 「知る主体」の脱構築は、知るフェミニスト／女性を弱体化させ、フェミニスト・ポリティクスの主体としての「女性」というカテゴリーを弱体化させる。しかし、ポストモダンの思想家が、「知る主体」を殺すのではなく、むしろ脱構築することができるように、フェミニズムもまた、政治的カテゴリーとしての「女性」を放棄する必要はない。
  - ・ フェミニストは、ポストモダン思想を生み出す主体や、その知識がもたらす政治的効果を脱構築することができるし、また、新たな「知る主体」を積極的に構築することができる。Nancy Hartsock は、マルクス主義を援用し、従属させられている人々が、「歴史の客体であると同時に主体として自分自身を構成する歴史的、政治的、理論的プロセスに参与する」(Hartsock 1990: 170) ことができると示唆する。このような関与の仕方によって、フェミニストは、支配に抵抗する能力を持つ社会的に構成された道徳的主体として、「共通の経験と利益を共有する女性[women-inssofar-as-they-share-common-experienceand-interests]」という概念を保持することができる。

#### ■ 体現と感情 (97)

- ・ ポストモダン思想は本質主義からの解放をもたらすが、身体や感情に関する論点を依然として残している。フェミニズムがポストモダン思想と異なるのは、「女性」としての従属的な経験をどのように感じるのかという感情を重要視する点である。
  - ・ フェミニストは、社会生活が物質的な身体の中で営まれていることと、身体と感情は、社会的に構築され、文化的に可変であることの両方を認識する有用な方法を見出すのに苦心している。

- ・ 女性の従属は、ジェンダー、セクシュアリティ、身体の「意味」の問題であるだけでなく、実際の「身体的経験」の問題でもある。例えば、月経、出産、病気、高齢化、障害に関する言説は、時代や文化によって異なり、これらの出来事がどのように経験され、定義され、規制され、評価されるかに影響を与える。しかし、月経、出産、病気、高齢化、障害は確かに、その言説的構造の外に存在する身体的経験である。
- ・ ポストモダン思想は、身体がどのように言説の中で生み出され、どのような結果をもたらすかを分析する上で有用であるが、身体的障害、加齢、性差や生殖に関する差異は、完全に言説だけで説明できる問題ではない。

#### ■権力、抵抗、解放のつながり (98-99)

- ・ 権力を生産的なものとして捉える Foucault の理論は、ジェンダー化された実際の権力関係を説明することを意図していない。ポストモダン思想は、なぜ男性がいまだに政治的・経済的分野の多くの領域を支配しているのか、なぜ女性に対するエンパワーメントがこれほどまでに限られているのか、なぜフェミニズムの言説がしばしば無力化されるのかについて説明しない。
  - ・ Sandra Bartky (1990) は、Foucault の権力批判が解放的な響きをもっているにもかかわらず、西洋の政治理論の性差別を再生産していると結論づけている。

#### 4. 結論 (100-101)

- ・ ポストモダン思想は英語圏の社会理論に大きな影響を与えたが、文化やテキスト、表象、言説、パフォーマンスを脱構築することを優先し、日常生活の社会的関係に関する調査を軽んじてきた。
  - ・ 政治、倫理、認識論のつながりを真剣に捉えるならば、フェミニスト研究者は、思想や理論がどのように構成され、どのような効果をもたらすかについて、ポストモダン思想を取り入れた批判的な考察を展開する必要がある。それと同時にフェミニスト研究者は、現実の社会的分断や女性（そして男性やその他の人々）の日常的経験の多様性を把握するための研究を進めるべきである。

【参考文献】(Ramazanoglu and Holland (2002) に未記載の文献を挙げる。)

相澤伸依, 2005, 「ミシェル・フーコーの方法論——系譜学の導入について」『実践哲学研究』28: 1-28.

Deleuze, Gilles, 1968, *Différence et Répétition*, Presses Universitaires de France. (=財津理訳, 1992, 『差異と反復』, 河出書房.)

石毛弓, 2007, 「リオタールの大きな物語と小さな物語——概念の定義とその発展の可能性について」『龍谷哲学論集』21: 53-76.

- Liotard, Jean-François, 1979, *Introduction: The Postmodern Condition: A Report on Knowledge*, Manchester University Press. (=小林康夫訳, 1989, 『ポスト・モダンの条件——知・社会・言語ゲーム』水声社.)
- 大崎晴美, 1998, 「ドゥルーズの哲学における主体の死と再生」『哲学』日本哲学会, 1998(49): 280-289.
- 鈴木和歌奈, 2020, 「実験室から「相互の係わりあい」の民族誌へ——ポスト・アクターネットワーク理論の展開とダナ・ハラウェイに注目して」『年報 科学・技術・社会』29: 3-29.